

高等学校における授業研究チームによる授業改革 ～ 持続可能な校内研修体制づくりのために ～

学籍番号209114

氏名 阪下 司

主指導教員 寺嶋 浩介

1. 背景

1.1 実習校の現状

実習校は、大阪府下の普通科高校であり、学力に課題を抱える生徒が多く在籍する。授業規律の徹底が難しく、疲弊した教員も多い。そんな中で校内授業研究を進める要となるのは、有志で授業見学や研修を実施している「授業研究チーム」である。しかし、研修等を実施しても参加者が少ないなど、教員への働きかけや活動の実施方法に課題が見られる。チーム外の教員の多くも、多忙感などから授業研究や研修への参加意欲に乏しい。

1.2 実習の目的

主な実習の目的は「授業研究の組織体制づくり」と「教員の授業研究に対する意識改善」の2つである。実習開始時点では授業研究チームは具体的な目標を持たずに活動を進めていた。各活動を単発的に実施するのではなく、具体的なビジョンに則って持続的かつ発展的な活動ができる体制を作る必要がある。また、学校や教員のニーズに即した活動の企画ができるよう、授業研究チームと教員の間で情報共有や意思疎通がしやすい体制づくりも必要である。授業研究体制の確立により校内授業研究を活性化させるためには、より多くの教員に授業研究に対する関心をもってもらい、授業見学や研修に対して前向きになってもらうことが必要であるため、教員の意識改善にも取り組んだ。

2. 取組みの概要

2.1 目標(ビジョン)の設定とチームの取組み(1年目)

1年目の実習では、まず実習校の現状をより深く知るために教員対象のアンケートを実施し、実習校の授業研究におけるニーズを調査した。また、授業研究チームの取組みは単発的であり、それぞれの取組みが計画性を持って実施されているものではない。その上、各取組みを評価するための指標もないため、「授業研究の指針」となるものを作成したいと考えた。作成にあたっては、先行研究だけでなく、他校の授業研究の実践を参考にすることで、実習校において活動の目標や評価基準となる【校内授業研究活性化のためのチェックリスト】を作成することができた。そのチェックリストを基に「授業見学週間 OPEN CLASS」にテーマの設定などの改善を加え、実施した。

2.2 校内研修とチームの取組みの往還(2年目)

管理職が、来年度からの観点別評価導入にスムーズに対応するため、「府の指導主事が介入する研修(以後「観点別評価研修」)」を申し込んだことにより、学校内の授業研究に関わるニーズが大きく変化した。「観点別評価」を意識した授業実践をよく知るための校内研修や、研究授業などを今年度中に実施することが必要となったのである。授業研究チームとしては、これまで通り教員のニーズを分析し、それに応えるための取組みを企画し実施していただくだけでなく、「観点別評価研修」と「授業研究チーム活動」の往還をキーワードに活動を進めた。指導主事を交えたものも含めた4回に渡る校内研修を、より実りあるものにするため、OPEN CLASSだけではなく中学校訪問や教員向け模擬授業、「授業研だより」の発行など新たな取組みを授業研究チームとして企画し、実施した。令和3年12月初旬には、1年目の取組みの中で作成した【校内授業研究活性化のためのチェックリスト】を基に教員アンケートを作成し、実習の成果と課題の分析に活用した。

3. 成果と課題

「授業研究の組織体制づくり」との点における成果は、2年目に実施した教員アンケートの結果から見て取れる。以下4つの項目について肯定的な意見が過半数であった。

- ・「授業研究チームの活動や校内研修」の成果や課題は、学校全体で共有されている。
- ・授業研究チームは「学校の現状に応じたテーマ」を設定して取組みを進めることが出来ている。
- ・授業研究チームの取組みには先生方が日々の授業実践に活かせるような工夫がある。
- ・授業研究チームの取組みには「研究をマンネリ化させないための工夫やアイデア」が盛り込まれている。

また、アンケート作成にも活用した【校内授業研究活性化のためのチェックリスト】を授業研究チームにおいて今後も引き継いでいくべき活動目標として位置付けられたことで、計画的に取組みを進めるための基盤を整えることが出来たことも成果の一つであると考えられる。課題としては、授業研究について「学校全体で取り組むべき大きな課題」としての認識が未だ不十分であることである。対策として、これまで単発的かつ突発的に提案されていた授業研究チームの活動を年間行事予定に組み込むことで、教員全体が授業研究の重要性をより認識しやすい環境をつくりたい。

もう一つの目的である「教員の授業研究に対する意識改善」に関する成果としては、授業研究チームメンバーの意識向上と、教員全体の意識向上が見られた。特に教員全体の意識向上に関しては2.2で述べた教員アンケートにおいて、授業研究に対して前向きな気持ちを持つ教員の割合が約70%であることが結果として示された。課題としては、未だ多忙感により授業研究よりも他業務を優先する教員が多いことが挙げられる。これまでの取組みの参加率や教員からの意見から、授業研究においては「内容」だけでなく「適切な実施時期・時間」を判断することが大切であるということが指摘された。時間的に余裕のあるタイミングを判断して実施を進めることが今後取組みを進める際の鍵となるはずである。